

平佐焼の考古学

渡辺芳郎 (鹿児島大学法文学部)

はじめに

陶器：有色粘土を原料として、1200～1300℃で焼成。吸水性あり。

磁器：白色陶石を原料として、1300～1400℃で焼成。吸水性なし。

日本における磁器生産の始まり

1610年代、肥前地方（現在の佐賀・長崎県）で始まる（伊万里焼・有田焼）

→17世紀後半、中国磁器の輸入途絶（明清動乱）→日本磁器市場の空白→肥前磁器流通

17世紀後半：日本各地で磁器生産の試み→いずれも短期間で終息

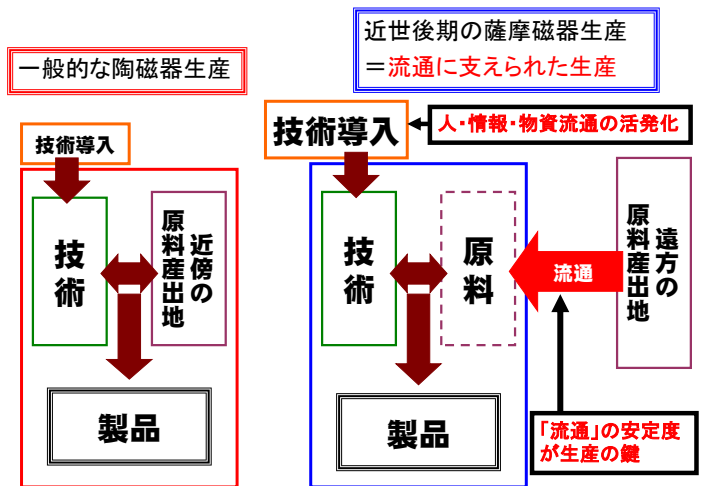
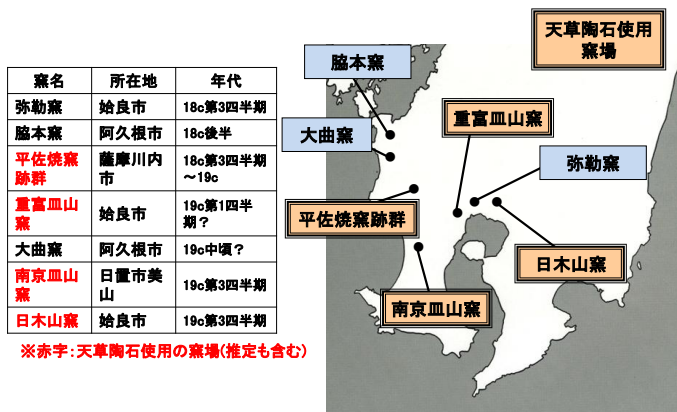
広島県福山市姫谷焼・福岡県東峰村上ノ原窯・石川県加賀市九谷焼。鹿児島県始良市山元窯

→原料である陶石の安定確保が難しかったからか？

18世紀後半以後：肥後天草陶石（熊本県）が流通→各地で磁器窯の勃興

→「流通に支えられた生産」＝平佐焼もそのひとつ

18世紀後半以後の薩摩磁器窯



1. 平佐焼の歴史と展開

阿久根市脇本窯跡：平佐郷白和町の今井儀右衛門が、出水郡脇本町（現阿久根市）で開窯したと伝えられる（安永年間（1772-81）？）。しかし数年で失敗し、平佐に戻るが、その際に北郷家（平佐の領主）家臣・伊地知団右衛門がその話を聞き、平佐焼窯場を開窯したとされる。

平佐焼窯跡群：江戸時代の窯として「北郷窯」「大窯」「新窯」の3基が確認

平佐焼の開窯年代について

天明6年（1786）開窯説：現在、多くの書物で記されている年代

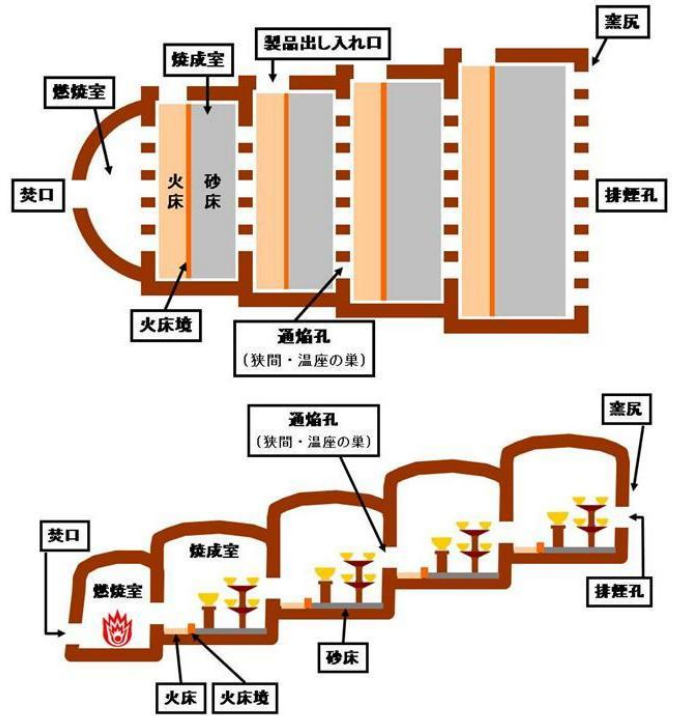
出典：『薩摩焼の研究』（1941年）

→「天明六年」銘の石塔

→近年の再検討の結果、安永7・8年（1778・79年）開窯の可能性が高い

- ①「天明四年」「伊地知氏 平李□」銘をもつ香炉が伝来している。
- ②大正8年（1919）に北郷邸が焼失する前に編集された『北郷久信報効事歴並歴代系譜』（1916）に安永7年（1778）平佐窯開窯と記されている。

③文化14年（1817）6月24日付の『上田宜珍日記』に「38年前＝安永8年頃」に、天草から絵師・清水与右衛門（旧名四郎七）が平佐に移住し、永住したと記されている。



連房式登窯の構造模式図

平佐北郷窯：最初に開かれた窯と推測されている。地表面からの測量調査により、燃焼室+3室の焼成室よりなる連房式登窯と推測される。全長約13m。

平佐大窯：燃焼室+12室の焼成室よりなる扇形連房式登窯。全長約46.3m＝近世薩摩焼最大規模の窯。

18c末あるいは19c初～幕末に操業

平佐大窯の開窯年代

文化7年（1810）説：野元堅一郎 1982「薩摩」『日本やきもの集成12』など

『近国焼物山大概書上帳』

天草で陶石を商った庄屋・上田家に伝わる文書。寛政8年（1796）年。九州～西日本の窯場62ヶ所の窯数・製品内容・人員などを記述・今で言えば「市場調査報告書」のようなものか

→18世紀末の九州の窯場を知る上で貴重な史料

薩摩領皿山之分

一川内皿山

此数拾式間 竈 七 登

但 天草土斗ヲ以南京

燒之中品燒物出来

是者人高九七拾人程平佐殿御仕入山ニ而燒物

師之分皆帶刀御免之仁斗ニ御座候

「川内皿山」＝平佐焼窯場

「竈壺登／此数拾式間」

平佐焼窯跡群で12室の焼成室を作る窯は大窯以外にない

→寛政8年(1796)段階で大窯は開窯していた可能性

→「竈壺登」＝この段階ですでに北郷窯は稼働していない

物原の発掘調査

物原：製品焼成時に生じた失敗品や、窯詰め
に用いた窯道具の廃棄場所

※きれいに焼き上がった製品は出荷されてしまい、
窯跡には残らない

物原の層位的な発掘調査

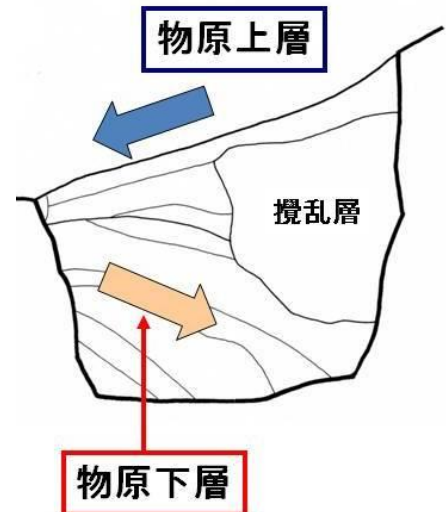
※地層累重の法則：攪乱を受けていない地層
において下の地層は上の地層よりも古い

物原下層遺物：19世紀初め頃

物原上層遺物：19世紀中頃～幕末

→時期によって生産していた(つまり流通
していた)磁器の内容が異なる

例：半筒碗→端反(はぞり)碗



物原トレンチ南壁断面図

物原出土の失敗品や窯道具

→当時の磁器焼成技術を知る上で貴重な手がかり

例：センベイ＝焼成時に製品の下に敷く磁土製の
小円板

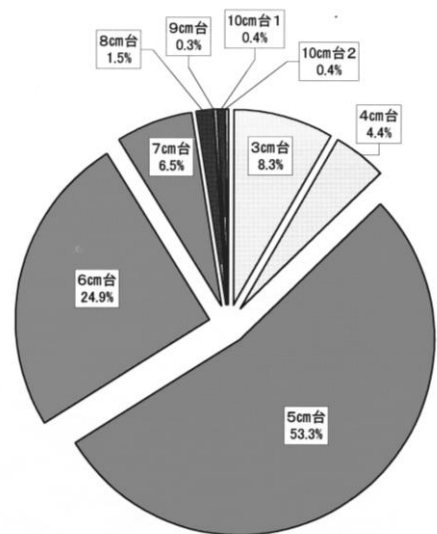
→焼成時の汚れや破損を防ぐ

→その直径は製品の大きさと比例することから、
生産内容を推定する上で手がかりとなる

例：突起付大形センベイ

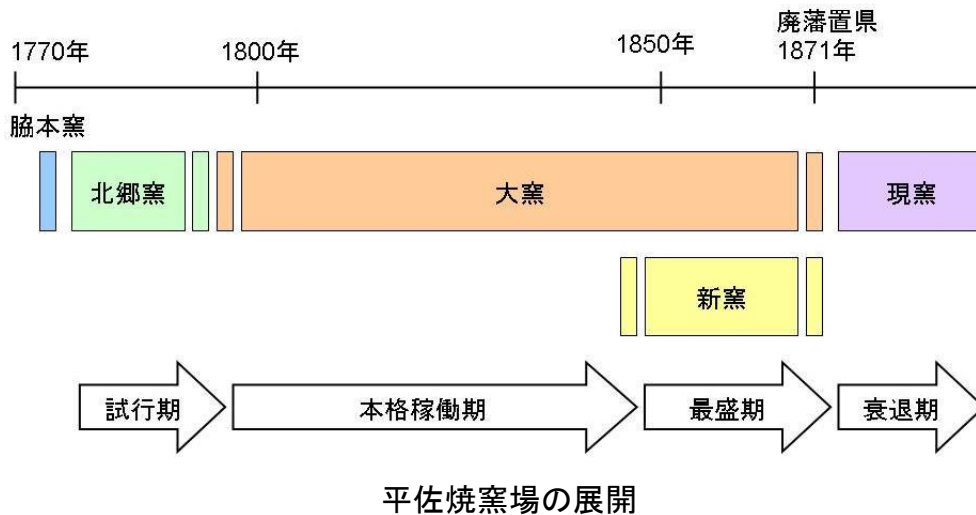
大形の皿を焼成する際の底部の「へたり」防止

→肥前地方の「ハリ支え技法」と共通



物原トレンチ出土センベイ
直径比率 (1714点)

平佐新窯：1999年に薩摩川内市(旧川内市)教育委員会により発掘調査。燃烧室+4室の
焼成室よりなる扇形連房式登窯と物原、作業場跡(?)が検出される。
年代は19c中頃～幕末と推測され、大窯と並行して操業していた。
＝平佐焼窯場最盛期



2. 磁器製作技術の交流について

(1) 平佐焼開窯・操業にあたっての技術導入

① 他藩からの技術導入

肥後天草の上田家文書（陶石を商った庄屋）

● 宝暦 5 年(1755)～寛政 6 年(1794)と推測される文書

→ 上田家が平佐焼窯場に技術援助を申し出る内容

● 『上田宜珍日記』 文化 14 年(1817)6 月 14 日

「38 年前」(=1779 年頃)に「絵師・清水与右衛門」が天草から平佐に移住

→ 天草・上田家が、平佐焼窯場の開窯・操業に積極的に関わっていた可能性

● 皿山墓地：平佐焼窯場の関係者の墓石が多い

「寛政五年(1793)」「榮中常盛信女」「肥前國長与村之／富永利頭太／妻」

長与：現長崎県長与町。長与窯がある→長与焼の陶工（？）が平佐に来ていた

② 藩内(苗代川)からの技術導入

● 文化元年(1804)銘石塔：「白慶石」の名前（白姓：苗代川陶工）

→ 平佐焼窯場に苗代川陶工が参画していた

※ 文化 7 年銘の石塔にも「白慶碩」銘がある。同一人物か。

● 皿山墓地：白姓墓石あり

白正山妻(享和 2 年(1802)没)／白正鐵(文化元年(1804)没)／白庄徳?娘(文政 8 年(1825)没)

白欣甫?(天保 3 年(1832)没)／白正玄(天保 5 年(1834)没)／白元清(天保 7 年(1836)没)

→ 平佐焼窯場の白姓陶工は累代居住していた

平佐焼の開窯・操業にあたっては、他藩からの技術導入と、藩内(苗代川)からの技術導入があった可能性

(2) 平佐系磁器製作技術の伝播

① 苗代川南京皿山窯との関係

弘化3年(1846)：日置市美山・苗代川南京皿山窯開窯

●『御内用方萬留一番』嘉永元年(1848)7月21日

白欣圓・白欣碩を「肥前伝焼物方主取」に任命(「右兩人共、先祖の代より平佐え居付き」)

→苗代川で磁器窯=南京皿山窯開窯の際に、平佐にいた白姓陶工を呼び戻す

●『御内用方萬留一番』弘化3年(1846)

「平佐家来北郷次兵衛 拘者 仲蔵」という「竈打ち調え方に取馴れ居り候者」を南京皿山に派遣する

→磁器窯開窯にあたっては、磁器焼成のための窯の構築技術も重要であった

●南京皿山1号窯跡燃焼室奥壁の構築技法=平佐大窯跡燃焼室奥壁のそれと共通

→「仲蔵」の派遣と関係する可能性

●南京皿山2号窯跡の「火床境」の形態

→平佐大窯のそれと異なる(南京皿山窯は大窯操業時に開窯)

→平佐新窯・現窯(明治以後)の火床境と類似する

→南京皿山窯(苗代川)から窯構造の技術が平佐に逆流入した?

② 日木山窯との関係

加治木町日木山窯：万延元年(1860)開窯

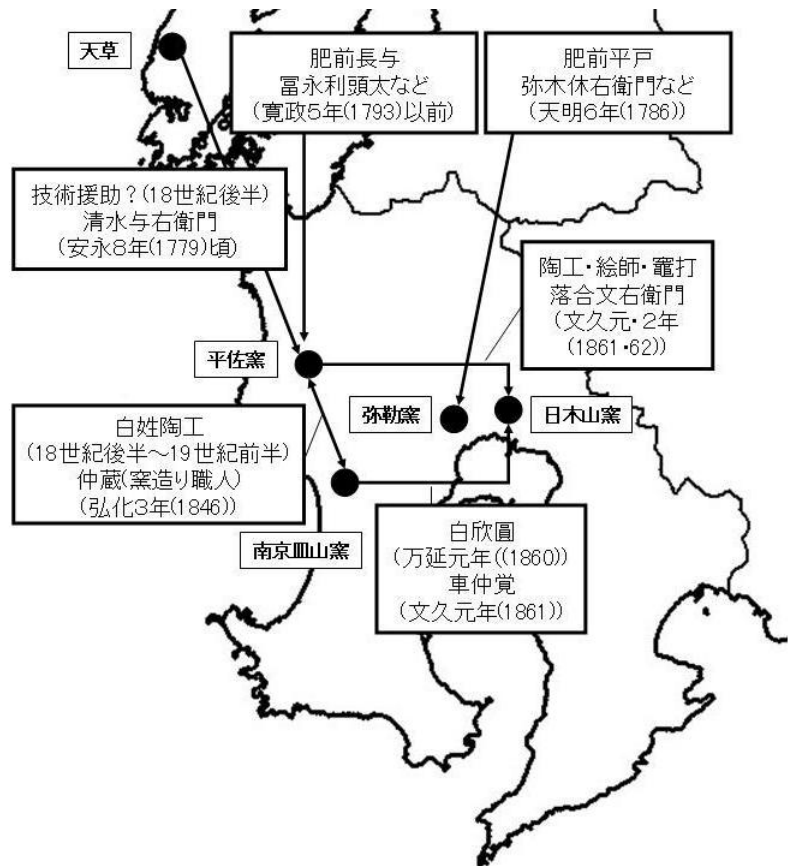
●開窯の際に苗代川の白欣圓を招致

●文久元年(1861)、平佐焼の主取・落合文右衛門と陶工・絵師各2名を招致

→南京皿山窯・平佐焼窯場から技術導入

●文久2年5月、平佐焼の「竈打・実右衛門」が新規の窯の構築のために派遣

→南京皿山窯と同様、窯構築に技術者派遣



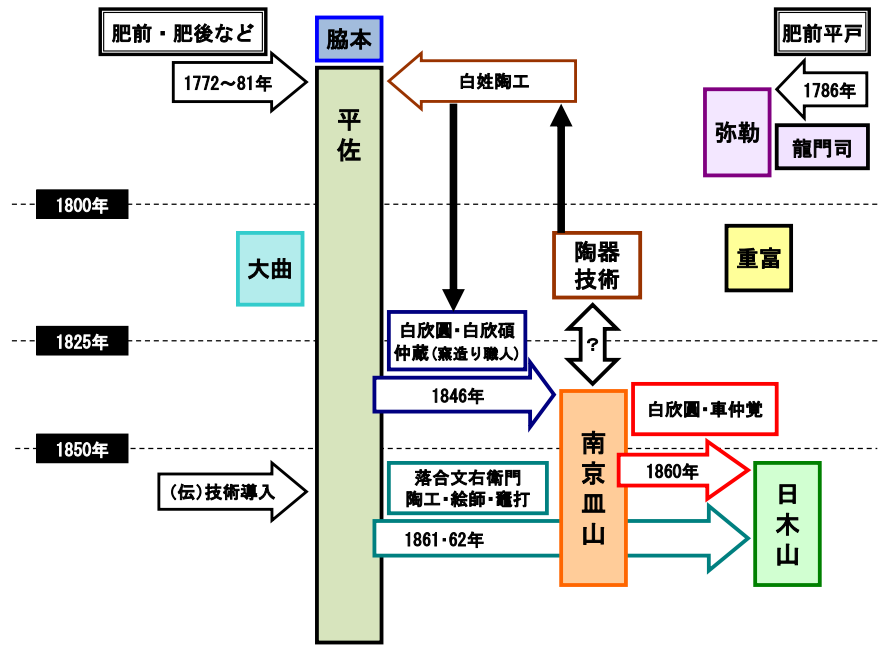
薩摩磁器窯場間の技術交流(1)

技術交流から見た鹿児島の磁器生産

18世紀後半:天草陶石の流通→肥前以外の磁器窯の勃興

18世紀後半:鹿児島では肥前・肥後から磁器製作技術を導入して磁器窯開窯

19世紀中頃:平佐焼窯場を中心とした藩内磁器窯場間の製作技術の交流



薩摩磁器窯場間の技術交流(2)

まとめ

- (1) 平佐焼の開窯年代は安永7・8年(1778・79年)が考えられること
- (2) 平佐での磁器生産は、近世後期の流通経済の発達にともなう「流通に支えられた生産」であること
- (3) 平佐大窯は、遅くとも寛政8年(1796年)には操業しており、近世薩摩焼の最大規模の窯であること
- (4) 平佐大窯と新窯が同時操業していた19世紀中頃～幕末が平佐焼の最盛期であること
- (5) 平佐の磁器製作は、外来の技術と在地の技術との融合で進められたこと
- (6) 平佐の磁器製作技術は、薩摩藩における磁器生産のセンター的役割を果たしたこと

おもな参考文献

- 前幸男編 2006『平佐新窯跡』薩摩川内市教育委員会
 関一之編 2005『日木山窯跡』加治木町教育委員会(現始良市)
 川内市歴史資料館編 2000『用と美—平佐焼の世界』展図録 川内市歴史資料館(現薩摩川内市)
 田沢金吾・小山富士夫 1941『薩摩焼の研究』座右宝刊行会(国書刊行会復刻 1987年)
 野元堅一郎 1982「薩摩」『日本やきもの集成 12』平凡社 pp. 123-131
 渡辺芳郎 2003『日本のやきもの 薩摩』淡交社
 渡辺芳郎 2007『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流研究室
 渡辺芳郎 2011「窯跡資料からわかること—近世薩摩焼の焼成技術—」『やきものづくりの考古学—鹿児島の縄文土器から薩摩焼まで—』鹿児島大学総合研究博物館
 渡辺芳郎・金田明大 2012『考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究』鹿児島大学法文学部